

金静希氏の論文『日本書紀』の「歴史」と朝鮮—世界構造と世界理念—は、『日本書紀』の、古代朝鮮に関する叙述について、テキスト論の見地、すなわち、『日本書紀』を一つの完結した作品として捉え、全体との連関において個々の叙述を分析する観点から、一貫性と整合性をもった解釈を提示することを基軸とする。

『日本書紀』、とりわけ巻第三以降の天皇紀については、古代史資料として利用される一方、それが提示する世界像や歴史像のトータルな把握、全体の中での各叙述の位置づけの検討が十分になされてきたとはいえない。そうした研究の現状において、本論は重要な試みとみとめられる。古代朝鮮に関する記事への着目から提示された『日本書紀』解釈は創見をふくみ、『日本書紀』研究の新たな成果として評価できる。本論そのものが、『日本書紀』の世界像把握において、古代朝鮮に関する記事に着目することの有効性の証明たりえている。『日本書紀』を資料として古代朝鮮や中国の文献その他の資料と照合しつつ解析している歴史学研究に対して、テキスト論の観点による具体性をもった問題提起を試みた点も、この論文の意義とみとめられよう。

以下、各章ごとに論文の趣旨と成果を確認する。

序章では、歴史的事実を追求する観点からの『日本書紀』研究とは異なるアプローチとして、テキスト論的な解釈態度を提起する。具体的には、『古事記』の朝鮮にかかわる叙述との比較検討をベースとし、両者の差異に、両者それぞれの世界認識と構築された世界表現の差異を読み取っていく。

「第一章「三韓」—天皇の世界の広がり」は、資料によって指示対象が一定でない「韓」「三韓」という概念に着目して、『日本書紀』の世界構造を問う。資料間の相違を、史実の吟味に直結させず、各資料が創り出す世界区分の差異として捉えることで、テキストとしての『日本書紀』が構築した世界を確かめ、その世界像の中での「韓」、とりわけ「三韓」の意味をさぐっている。

第一節では、『三国志』『後漢書』等の中国正史、朝鮮古代の金石文に現われた「韓」「三韓」の用例とその差異を整理し、続く『古事記』『日本書紀』における「韓」「三韓」表象の特質を浮き彫りにする基盤としている。その上で、第二節は、『古事記』における「韓」の用法を検討し、第三節では、『日本書紀』における「韓」「三韓」の用法を包括的に検討している。検討を通じて、『古事記』においては、古代朝鮮の表象である「韓」は、神代から天皇の統治下に収斂すべき地として提示され、「呉」「百濟」「新羅」の国名も、文物の渡来など天皇世界との関係においてのみ表され、自立した表象たりえないことが明らかにされた。それに対し『日本書紀』において「韓」は、日本を中心とする中華的世界を、朝貢国として構成する。注目されるのは、本論文が「三韓」の用例の綿密な再検討を通じて、『日本書紀』における「三韓」が、天皇家の財政的基盤を担う「内官家」とされた、高句麗（高麗）をふくまない百濟、任那、新羅を指すことを明らかにした点である。第一節の諸資料に示される「三韓」とは異なるのであり、高句麗と対抗的に描かれることとあわせ、『日本書紀』による世界認識としての意義がみとめられる。

「第二章「任那」と「任那日本府」」は、第一章と同様の方法で、「任那」「任那日本

府」を解析する。「任那」の用例は『古事記』にはなく、「任那日本府」は『日本書紀』にしか用例を見出せない。テキスト論の観点からすれば、これは、両者が『日本書紀』の朝鮮表象を特徴づける指標である可能性を示す。本章も、それ自体の歴史的実を問うのではなく、そのテキスト上の意味、それらが照らし出す世界構造を追求している。

第一節で、中国の正史、古代朝鮮の史料における「任那」「加羅」の用例について、両者の連関、倭の支配の文脈で語られることを確かめた上で、第二節で、『日本書紀』における「任那」を分析する。「任那」という国号を崇神天皇の名に由来するとする物語、「任那之調」の特異性、「任那」復興の試みの記述等から、「内官家」の中でも天皇家への直属を特徴とする「任那」の位置を明らかにする。

第三節では、『日本書紀』における「任那日本府」の機能について、その名称と、出現する物語上の文脈とに注目して分析している。のちに筑紫大宰府に継承される、外部である高句麗、新羅に対する軍事的機能をそなえた機構、という結論に達しているが、これについては根拠が乏しく強引な解釈ではないかとの審査委員の意見があった。

第四節は、「任那」「任那日本府」を中心に、第一、二章で分析してきた、『日本書紀』が表し出す古代朝鮮諸国と日本との関係を、総括的に考察する。「三絞之綱」とされる関係を、日本、百濟、任那の垂直的な連合に同定し、任那がその密接な関係をささえていることを指摘する。また、「任那日本府」は、上記連合の結束を示しながら、いわば日本の外部の中の内部としての任那と、外部を構成する高句麗とを照らし出す機能をもつことを明らかにしている。

「第三章 ヒボコ物語—世界理念のあらわれ」は、『古事記』『日本書紀』双方に語られることから、一体的に論じられることも多い、新羅王の子アメノヒボコの物語を峻別し、『古事記』『日本書紀』を対比的に分析する。その分析を踏まえ、『古事記』『日本書紀』の、朝鮮にかかわる叙述の特徴の見直しを通じ、両書の相違する世界理念を明らかにすることをめざした。それによれば、アメノヒボコが婚姻を通じて列島にとどまり、神功皇后らに繋がる系譜をもたらす『古事記』の物語は、新羅や百濟が天皇世界の外部ではなく周縁に位置づけられ、平和的にその秩序に編入される世界観に照応する。それに対して『日本書紀』のアメノヒボコは婚姻せず、系譜的に神功皇后らに関わることなく、宝物が天皇に帰属したにとどまる。こうした物語的特徴は、新羅など朝鮮諸国を蕃国として、天皇の教化の対象たる外部として捉えるその世界観と整合的、補完的であることを明らかにしているのである。

審査委員からは、歴史学的研究への寄与をめざしながら、とりわけ日本における古代朝鮮史研究の現状が踏まえられていないことの問題、漢籍の取り扱いや解釈において粗雑で未熟な点が多々みられること、恣意的な解釈に陥っている箇所が見えること、テキストとして『日本書紀』を理解し、問題を提起することに十分に自覚的でない、などの指摘があった。歴史的事実を問う研究動向に対し、テキスト論の観点から問題を投げかけ、『日本書紀』や古代朝鮮史に関して新たな共通理解を構築するには、多くの点で、論を精練する必要がある。しかしながら、明確な問題設定と方法的態度をもって、具体的な分析を幅広く実践し、荒削りながら、一定の成果と今後の発展可能性を明示しえたことの意義は、なお十分にみとめられる。

本審査委員会は協議の結果、全員一致して、本論文が、金静希氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。